

現代社会 一般入試 B・C 学習アドバイス（傾向と対策）

■一般入試 B（2月3日）

出題傾向

試験時間は 60 分、大問は 4 題、小問は 40 問である。

出題形式は四肢択一のマークシート方式であり、正誤判定問題、空欄補充問題、語句選択問題で構成されている。選択肢の記述量が多い問題が一定数あり、内容についてもやや細かな知識を問うものが見られる。難易度としては、大学入学共通テストと比較してほぼ同水準といえるだろう。

2021 年度の出題内容は以下の通りである。

1 現代社会分野（7 問）

地球環境問題、生命倫理、少子高齢化、日本の伝統文化、大衆社会、グローバル化、現代社会の諸課題

2 経済分野（15 問）

経済学者と経済学説、市場経済のしくみ、需要曲線と供給曲線

3 政治分野（9 問）

市民革命、社会契約説、法の支配、世界の政治体制、日本の議院内閣制

4 国際政治分野（9 問）

原水爆禁止運動、軍備管理と軍縮条約（部分的核実験禁止条約、トラテロルコ条約、核拡散防止条約、SALT と START、INF 全廃条約）

■一般入試 C（2月7日）

出題傾向

試験時間は 60 分、大問は 4 問、小問は 34 問である。

出題形式は四肢択一のマークシート方式であり、正誤判定問題、空欄補充問題、語句選択問題で構成されている。選択肢の記述量が多い問題が一定数あり、内容についてもやや細かな知識を問うものが見られる。難易度としては、大学入学共通テストと比較してほぼ同水準といえるだろう。

2021 年度の出題内容は以下の通りである。

1 現代社会分野（7 問）

近代合理主義（デカルトとベーコン）、リサイクル法、公害問題、資源・エネルギー問題、地球環境問題、環境条約

2 経済分野（10 問）

経済主体、企業の形態、企業統治、景気変動、株式の持ち合い、終身雇用制、雇用問題、寡占、中小企業問題、企業の社会的責任

3 政治分野（10 問）

大日本帝国憲法、日本国憲法の人権（自由権、社会権、平等権、参政権、選挙権、請求

権)、新しい人権、情報公開法

4 国際政治分野 (7 問)

国家、地域紛争・民族紛争、国際法、国際裁判所、難民問題

学習アドバイス (一般入試 2 月 3 日、2 月 7 日 共通)

出題形式は、各日程いずれも試験時間が 60 分、大問数が 4 問でマークシート方式である。小問数は日程により多少異なるものの標準的な分量といえる。ただし、例年、各日程の大問¹では、それぞれの選択肢が 3～4 行からなる長文の問題も出題されているので、選択肢を注意深く読んでいくことが求められる。

出題内容は、おおむね教科書に準拠した標準的なレベルの問題から構成されており、過度に細かな知識を問う問題は少ない。上記の選択肢が長文の問題も、ほとんどが基本的な知識を問う内容なので、文字の多さに惑わされず各選択肢の正誤を丹念に判断してもらいたい。

以上の傾向を踏まえて、普段の現代社会の学習に際しては、教科書を繰り返し読むことを通じて基本事項の習得に努めてもらいたい。教科書の内容をしっかりと習得することができていれば、本学の入試問題のほとんどを正答することができるはずである。そのうえで、余裕があれば資料集や参考書なども活用すると良いだろう。

では、以下に各分野ごとに出题頻度の高いテーマを挙げておきたい。

現代社会分野

現代社会分野は例年、各日程とも大問¹で出題されている。テーマとしては、地球環境問題、資源・エネルギー問題、生命倫理が最頻出であり、2021 年度も各日程において出題されている。その他にも、青年期の課題、情報化社会、思想と宗教、日本の伝統文化なども頻出なので注意が必要である。この分野は、例年出題されるテーマがかなり固定されているので、上記テーマについては必ずしっかりと学習して事前に対策を立てておこう。また、現代社会分野では、選択肢のなかで時事的な事柄が問われることもよくあるので、普段から新聞やテレビ、インターネットなどを通じて話題となったニュースにも接するようにしておこう。

政治分野

政治分野は例年、各日程とも大問³で出題されている。内容としては、特定のテーマに偏ることなく満遍なく出題されているが、特に日本国憲法からの出題が中心となっており、2021 年度も一般入試 C (2 月 7 日) において、日本国憲法の人権に関する問題が数多く出題されている。そのため、政治分野では日本国憲法の学習にしっかりと時間を割くことが求められる。また、民主主義の基本原則 (法の支配、社会契約説など)、世界の政治体制 (議院内閣制、大統領制、民主集中制、開発独裁など) に関する出題も目立つので対策を立てておこう。

経済分野

経済分野は例年、各日程とも大問[2]で出題されている。経済分野は、経済学説と経済理論に関する分野、経済の歴史と現状に関する分野に大きく分けることができるが、本学では経済学説と経済理論に関する分野の出題頻度が比較的高い傾向にある。2021 年度も一般入試 B（2 月 3 日）において、経済学者の著作と学説、需要曲線と供給曲線のシフトなどが出題されている。経済学説と経済理論は、現代社会のなかでも特に理解が大事な分野である。過去問などでこの分野の問題を間違えたときには、解説をしっかりと読んで学説やしくみを理解することを心掛けてほしい。なお、例年、各日程とも大問[2]の小問数は他の大問と比べて多く、得点に占めるウェイトが大きいとともに、この分野の学習を疎かにしていると連鎖的に失点するおそれがあるので注意しよう。

国際分野

国際分野は例年、各日程とも大問[4]で出題されている。国際分野は、国際政治分野と国際経済分野に分かれるが、2021 年度は各日程とも大問[4]は国際政治分野から出題された。本学では例年、国際政治分野からの出題頻度が高く、事前の対策は必須である。国際政治分野のなかでも、冷戦期の国際情勢、国際連合は最頻出のテーマなので、冷戦期の国際政治の流れや国際連合の主要機関については深い学習が求められる。また、国際社会（主権国家体制）の成立、冷戦後の地域紛争、国際機関の名称、軍備管理と軍縮条約も頻出のテーマとなっているので併せてしっかりと学習しておこう。

繰り返しとなるが、本学の一般入試の問題は総じて教科書に準拠した内容である。したがって、日頃から教科書をしっかりと読み込み、その内容を習熟できていれば高得点を挙げることも十分可能である。

もう一点、現代社会の学力を伸ばす学習方法として、用語集を手元に置いて積極的に活用することをお薦めする。現代社会も他の社会科の科目と同様、どうしても一定数の用語を覚えることが避けられない科目である。ただし、内容を理解せず丸暗記するだけではすぐに忘れてしまうので、見慣れない用語に出会ったときは、その都度用語集で意味を調べるという習慣を身に付けてもらいたい。用語集をこまめに調べるというのは一見地味なようだが、現代社会のさまざまな用語に対する理解度がぐっと深まるはずである。

現代社会とは文字通り、現代の社会に関する事柄（政治・経済・国際情勢など）を学ぶという科目である。そのため、普段から社会のさまざまな出来事に関心を持つておくことは入試対策としても有効である。まずは興味ある分野からで構わないので、新聞やテレビ、インターネットなどを通じてニュースに関心を向けてみると良いだろう。

ここまで読んで頂いた本学の出題傾向や学習アドバイスを指針としつつ、これから入試当日まで焦らず継続的に学習を進めてもらいたい。